

きゅうと

VOL. 1
NO.1
2006.12

「図書館情報」をリニューアル
きゅうとNEWSLETTER創刊!

CONTENTS

- つなぐ
お腹がへった時の図書館?
附属図書館研究開発室助教授 井上創造
あれこれ中央図書館
工学部4年 増田啓志
- 資料紹介
『南瞻部洲万国掌纂之図
(なんせんぶしゅうばんこくしょうかのず)』
- 自著紹介
- NEWS
- 図書館のご意見箱より
- 使ってますか? SCOPUS
- 図書館員のおしゃべりコラム

理系図書館 エントランスプラザ "Q-Bridge"

学生や教職員、地域の人たちをつなぐ架け橋になりたいとの願いを込め、Q-Bridgeと名付けました。パソコンや新聞・雑誌を配した空間は、ゆったりとくつろげる交流の場となっています。

NEWS

「図書館情報」をリニューアル。 「きゅうと NEWSLETTER」として生まれ変わりました

これまで昭和40年から41年間親しんでいただきました「図書館情報」を、このたび全面リニューアルし、「きゅうと NEWSLETTER」を発刊しました。「つなぐ」をコンセプトに、利用者みなさまと図書館・資料が、そして利用者みなさま同士がつながっていけるような誌面を目指します。

中学生が中央図書館で職場体験学習

中央図書館では、10月24～26日の3日間、職場体験学習として和白丘中学校2年生の生徒2人を受け入れました。

職場体験学習は、中学生の自己開拓の一環として、実際に仕事を手伝えるを通して、仕事の内容だけでなく、その難しさややりがいなど様々なことを体験し、今後の進路に役立てていくことが期待されています。

今回の体験学習では、大学図書館の概要説明、館内見学、図書の整理業務、閲覧カウンター業務など幅広く3日間に渡って体験してもらいました。最初は戸惑い気味でしたが、徐々に慣れていき、カウンター業務など、職員より手早く作業する場面も見られました。

二人とも事前に図書館の仕事をイメージして挑んだようですが、実際に体験してみて、表に見えない裏方の仕事

や図書館資料の維持管理の大切さなどを学んでいったようです。



台湾の国家図書館から図書の寄贈がありました —寄贈書紹介—

今年の2月、台湾の国家図書館(台北市、旧国立中央図書館)から、89冊の図書が本学附属図書館に寄贈されました。これは、本学の中国哲学史講座が研究室発行の既刊雑誌を同館に寄贈したことに応じて贈られたものです。

すべて台湾で出版された書籍で、台湾の自然・社会・文化に関する紹介書や研究書が数多く含まれています。たとえば、『台湾的断層与地震』、『台湾的煙業』、『台湾伝統信仰の鬼神崇拜』、『台湾的多元文化』、『日治時期台湾小説選読』、『戦時体制下的台湾史料特展図録』といった具合です。台湾

関係の図書資料が、まとまった形で本学に收藏されるのは珍しいことです。

中央図書館の書庫階に内容別に分類配架されていますので、学内はもとより、学外でも関心をお持ちの方に広く利用していただけたらと思います。なお、今回の寄贈書の中には、台湾の研究者の手になる、中国文化に関する研究書類も含まれています。

(柴田 篤 人文科学研究院教授)

図書館のご意見箱より

ご意見

貸し出し業務が「閉館30分前まで」なのは、とても意外でした。理系図書館などでは閉館まで貸し出しを行っている様ですし、できれば、ぎりぎりまで貸し出しが可能になるよう、検討をお願いします。せめて自動貸し出し手続き機だけでも稼働しておいて下さればと思います。

回答

中央図書館は、他の分館と比較して館内が広く窓閉め等の閉館準備などに時間を要するため、貸出業務終了時間を閉館30分前に設定していました。ご意見を受けて、閉館間際の貸出状況や閉館準備等の業務量の確認を行い、検討しました結果、貸出業務を「閉館15分前まで」と延長することにしました。

※みなさまからのご意見は、図書館のサービス向上につながる大切な声です。図書館に対するご意見・ご要望は、ご遠慮なくお寄せください。



お腹がへった時の図書館？

附属図書館研究開発室助教授 井上創造

未来の話をしませ

10月から研究開発室に着任しました井上創造といいます。詳しくは、GoogleのWebサイトで検索してみてください…。

あれ？ 不思議に思った人がいるかもしれません、「図書館の人が、Googleなどという図書以外の情報にたよってしまっているのか？」

インターネットが発展した今、多くの情報は図書に頼らずとも入手することができます。また、活字化された図書は電子化される動きが進んでいます。近い将来にはほとんどの情報が図書館に行かずに入手できるようになるでしょう。

近未来

それでは図書館には存在価値がないのでしょうか？ いいえ。私が考えるに、「図書館」の「館」の文字の方に注目してほしいのです。次の図は、私が考える近未来の図書館の機能を、現在存在する近い用語で表しています。



図において、横軸は利用のしかたを表しています。縦軸は、利用者どうしのかかわりを表しています。そして各領域の色は、現物による(リアルな)ものか、情報システムによる(バーチャルな)ものかを区別しています。

この2軸でできる平面の各領域はどうでしょうか。バーチャルな機能では、調べることや、他人との交流で気づくことはできます。しかし、静かな環境で集中したり、他人の勉強ぶりに感化されたり、グループで吐息がこぼれるような熱のこもったディスカッションをすることは、バーチャルな世界では近未来でもそう簡単にはできないのです。つまり、近未来の図書館は、「調べる、気づく、居るを総合して情報を入手できる」ものだと私は考えます。

もっと未来

タイトルに関係するのですが、上図の左には、もっと未来の図書館の利用のしかたがかくれているのではないかと考えています。それは、「生活する」です。例えば、料理と、風呂と、寝室と、病院と、ファッションと図書館…。それがリアルなのかバーチャルなのかはまだ分かりません。でもそう考えるだけでも楽しくありませんか？ 研究開発室では、ITに興味ある人、図書館に夢がある人でゼミを計画しています。実は上記のような未来に向けて準備もしています。興味ある方は sozo@lib.kyushu-u.ac.jpまで。

あれこれ中央図書館

工学部電気情報工学科 4年 増田啓志

知っていますか？中央図書館のカウンターがあるフロアは2Fです。私は中央図書館でアルバイトするまではカウンターがあるフロアは1Fだとばかり思っていました。実は中央図書館の主要部分は地上3F、地下1Fの建物なのです。普通に利用しているだけでは気がつかないこともあるようです。今回は、良い機会ですので働く場としての図書館についても書かせていただきます。

先生や学外の方もいらっしゃるのですが、大学の図書館ですので、利用者は学生の方がほとんどです。平日はもちろん、土日でも文献調査や勉強のために利用者は多いです。

一番利用が増えるのは試験期間中です。この時期は図書の貸出、返却が非常に多いです。その為、イレギュラーな対応も多く、職員としても学生としても気が抜けません。

図書館について

私自身は工学部の学生ですので、利用者としては中央図書館と理系図書館を利用しています。理系図書館は伊都キャンパスにあります。建物がとても綺麗で館内もかなり広いです。利用者としてはMy Libraryと研究個室が便利だなと思います。My Libraryはインターネットで他館の本の配送や予約、貸出の延長などが出来ます。研究個室は文字通り個室ですので、非常に集中することができ、勉強の効率が上がります。

エピソード

以前、館内で携帯電話を無くされた利用者の方がいました。トイレに行っている間に携帯電話がなくなったので、携帯電話を利用停止にしたいとの事でNTTドコモに電話して、一時的に利用停止の手続きをしたことがあります。この方の携帯電話は後々、ご自身の研究室で見つかり、早とちりだったことがわかったのですが、なかには見つからずに本当に困っている方もいます。落し物を見つけれられた際はカウンターまでお持ち下さい。

今後について

噂ではそろそろ、試験的に理系図書館にて全学共通ICカードが導入されるそうです。私の友達も関わっているみたいです。ITの力を借りて、図書館が利用者の方にも職員にもますます便利になっていくといいなと思います。

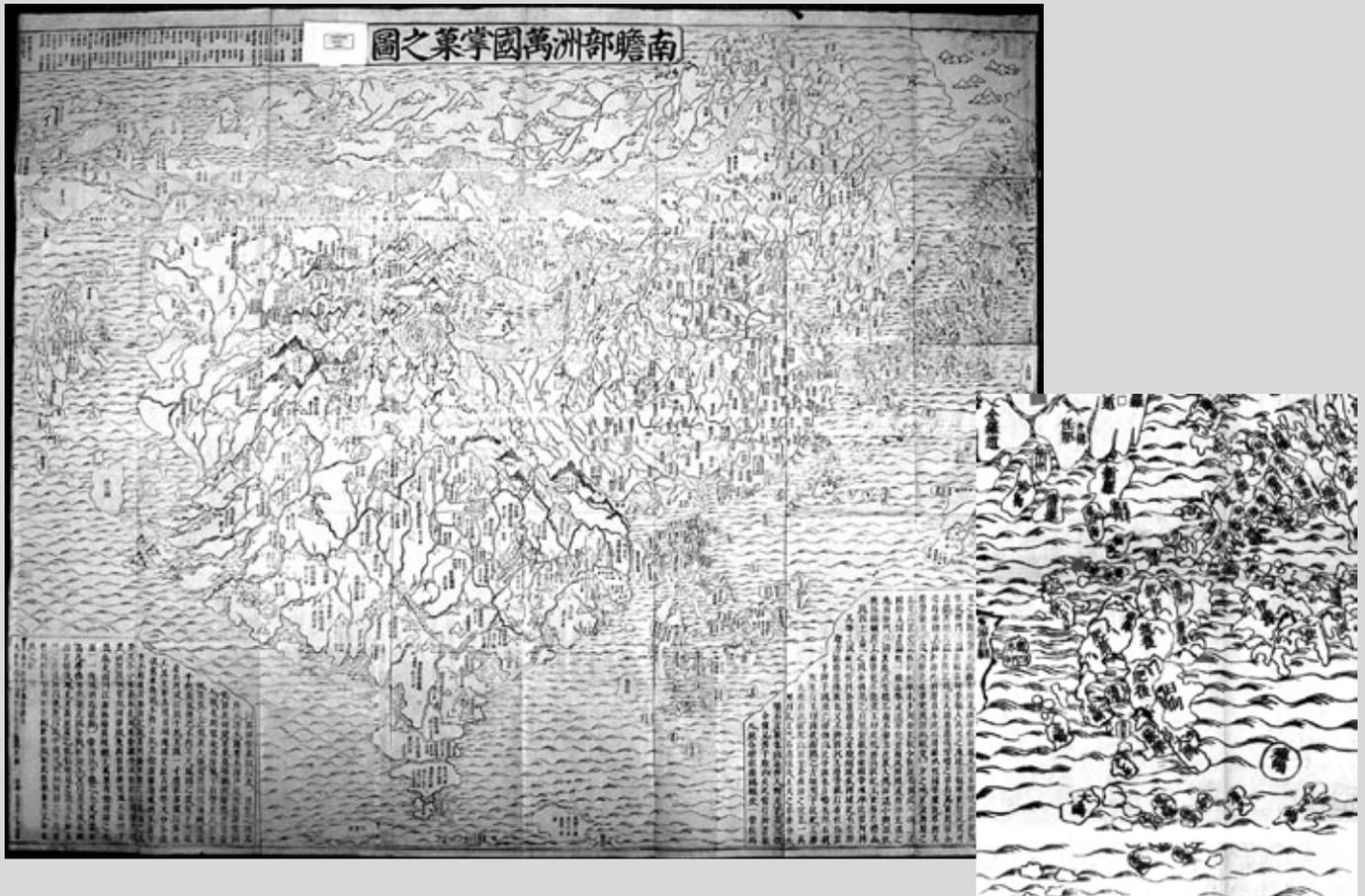




南瞻部洲万国掌菓之図 なんせんぶしゅうばんこくしょうかのず

大学院人文科学府修士 原田 愛

総合研究博物館助教授 宮崎克則



中央図書館に収蔵されている「桑木文庫」のなかに、宝永7年(1710)刊「南瞻部洲万国掌菓之図」と題した仏教系世界地図があります。これは、仏教において人間の居住世界とされる南瞻部洲を、基本的に北広南狭の形で描いた世界地図です。

現存する最古の仏教系世界図は、法隆寺蔵の「五天竺図」(重懐書写。貞治3年(1364))で、玄奘三蔵の『大唐西域記』の記載をもとに旅行ルートが朱線で地図上に示されています。江戸時代になり、西洋的な世界地図が紹介されると、西洋的な世界観と天竺(インド)を中心とした日本・中国からなる伝統的な三国世界観・仏教世界観を調和させ、新たな仏教系世界地図を作ろうとする動きが現れてきます。

この「南瞻部洲万国掌菓之図」も、その新しい世界観を反映させた世界地図で、「五天竺図」などに見える玄奘の足跡を明示することはありません。仏教図らしく須弥山を中心に天竺や中国を大きく描きつつも、周りには様々な国々が描かれています。北東部にはヨーロッパが群島状に描かれ、その国名もカタカナで大まかに示されています。日本の南北には小さな

島々も見られ、さらには昔の中国の書物に出てくる伝説的・民話的な国も記載されています。伝統的な仏教的3国世界観を中心に据えながらも、西洋を含めた人間世界(南瞻部洲)をより広く捉えようという意図が色濃く表現された世界地図といえるでしょう。

刊行された南瞻部洲図としては最初で、かつもっとも詳細な図として広く知られ、多くの通俗版や簡略版が本図を基にして刊行され、民間で流布しました。

作者は、近世華嚴宗中興の祖・僧澹(号・鳳潭)であり、浪華子という筆名で描かれています。比叡山延暦寺で修行し、華嚴宗再興に力を注いだ稀代の学僧で、享保8年(1723)には京都で妙徳山華嚴寺(通称・鈴虫寺)を開山しました。「華嚴の鳳潭」とも呼ばれ、華嚴をもって一代の業をなしました。

九州大学デジタルアーカイブ(<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/nansen/nansen-top>)で、本図の詳細画像と、解題にある漢文の訳文・注釈が閲覧できますので、ご参照ください。

自著紹介 本学教員より寄贈いただいた著作です。ぜひ読んでみてください



誌面の都合により、一部次号掲載とさせていただきます。

芸術工学研究院教授 石村 眞一

「まな板」 石村眞一著 法政大学出版局 2006.3
ISBN: 4588213210 (ものと人間の文化史; 132)

日本のまな板、^{まなびた} 俎のルーツは中国にある。殷時代には青銅製の俎が製作され、既に祭祀的な目的に使用されている。周時代以降、木に漆で加飾した俎も多数製作され、形態も多様になる。こうした傾向は漢時代あたりまで継承されるが、その後は俎の使用が衰退する。料理に使用するまな板の出土品は漢時代から増加し、漢時代後期には二人、三人で使用する大型のまな板も使用されている。漢時代までの俎、まな板はすべて床に座して使用しており、すべて4本足が付けられていた。中国では魏・晋時代以後、まな板の使用が立姿勢に移行する。

日本では古墳時代からまな板が使用されていたようで、下駄状の足になっている。平安期の史料には俎の使用が認められ、中国では衰退した祭祀的な使用が現在まで継承されている。日常で使用するまな板も昭和初期までは座して使用する家庭が多く、漢時代あたりの中国におけるまな板、俎の文化を延々と継承していた。

第二次大戦後は、それまで付けられていた足がなくなり、少し丸く削られていた表面が平らになった。結果的にヨーロッパのまな板と似たような形態になってしまった。たかが一枚の板にも、実は極めて複雑な発達と独自の文化が存在する。

[中央図書館 / 芸術工学分館 / 六本松分館に所蔵]

名誉教授・言文 田島 松二

「ことばの楽しみ：東西の文化を越えて」
ISBN: 4523300720 田島松二編 南雲堂 2006.3

本書は、ことばを学び、教え、研究してきた方々に、ご自分の専門分野に関する論文や随想を寄稿していただいたものを、編者の責任で一書にまとめたものである。36名からなる執筆者の大半は英語英米文学者であるが、日本文学、中国文学、経済学の専門家も含まれている。年齢構成も、それぞれの分野でわが国を代表する方々から、研究生活を始めて間もない新進まで多彩である。

内容は、言語史的には古・中英語から現代英米語まで、文学史的には中世英文学から現代英米文学までの多様な分野、さらには芭蕉、漱石、芥川といった日本文学まで、と広範囲にわたっている。

いずれ劣らぬ力作揃いであるが、とりわけ、エマソン、ソローの自然観と中国思想の関係を扱った中国文学者の論文、「エコノミー」という英語の意味変遷を辿った経済学者の論文、芭蕉(「閑さや岩にしみ入る蝉の声」)を論じた英文学者の遺稿等々、示唆に富む刺激的な論考や随想を数多く収録できたことを編者としてはひそかに喜んでいる。

[中央図書館 / 六本松分館に所蔵]

応用力学研究所教授 柳 哲雄

「里海論」(さとうみろん)
ISBN: 4769910320 柳哲雄著 恒星社厚生閣 2006.2

沿岸海域は食料や海運など人間に身近な空間でありながら、その状況や詳細を知ることは難しい。特に人間活動の影響は大きく、陸域から流入した物質が水質に影響を及ぼしたり、埋め立てにより大きく環境が変化したり、乱獲により生物資源が減少したり、海中構造物の設置により流れが変化したり等、現在の沿岸海域は様々な問題を抱えている。それらは「海」そのもの問題ではなく、人間が海とどう関わるかで、その将来が決まる問題である。

本書は「人手が加わることにより、生産性と生物多様性が高くなった海」として、著者が定義した「里海」と呼ばれる海域を中心に、人間が自然とどう関わるかによって決まる様々な自然のあり方を紹介し、その豊かさや危機的状況を解説しながら、人と海の望ましい新たな関わり方を提案している。

[筑紫分館に所蔵]

比較社会文化研究院教授 高橋 憲一

「ガリレオの迷宮：自然は数学の言語で書かれているか？」
ISBN: 4320005694 高橋憲一著、共立出版 2006.5

本書は著者の20数年来の研究をまとめたものです。ガリレオの運動論がどのように形成されたかを歴史的に再構成すること、これがテーマです。

本書の表題の由来を説明することで、紹介とさせていただきます。彼の有名な言葉に「自然は数学の言語で書かれている」というのがあります。数学的言語によらなければ「暗い迷宮を虚しく彷徨うだけ」だというのですが、運動という自然現象を数学的に解明する際に、ガリレオ自身は、研究上の曲折・停滞・中断・再開を何度も体験し、迷路の中を彷徨っているようなものでした。ガリレオ自身の運動論は、「暗い迷宮」を歩み通して得られた成果なのです。本書はガリレオ全集には一部分未収録の自筆原稿(手稿群72)を新たな視点に立って分析することで、彼の道筋を克明に辿り直し、著者としては、迷宮の構造を明らかにすることができたと自負しています。そして、ガリレオを創始者とする近代科学の成立という歴史的事件が現代の我々をも虜にして、新たな「迷宮」に誘っていく様が素描されています。

[六本松分館に所蔵]

※本書は、第60回毎日出版社文化賞(自然科学部門)を受賞しました。

このほか、以下の先生方より、著作をご寄贈いただきました。

言語文化研究院教授 井上 奈良彦

「議論法：探求と弁論」
ジョージ・W・ジーゲルミュラー、ジャック・ケイ[共]著；
ISBN: 4938910896
九州大学大学院比較社会文化学府言語コミュニケーション研究室訳 花書院 2006.3
[中央図書館/六本松分館/理系図書館/文系合同図書室]

芸術工学研究院助教授 古賀 徹

「散乱する展示たち = Exhibitions dispersing」
古賀徹編著；佐々木喜美代[ほか]著 九州大学出版会 2006.3
ISBN: 4873789060
[中央図書館 / 医学分館 / 芸術工学分館 / 理系図書館]

芸術工学研究院教授 佐藤 優

「デザインの心得：佐藤優研究室活動報告書 2006」
佐藤優著
九州大学大学院芸術工学研究院視覚情報部門佐藤優研究室 2006.3
[中央図書館 / 医学分館 / 芸術工学分館 / 六本松分館 / 理系図書館]

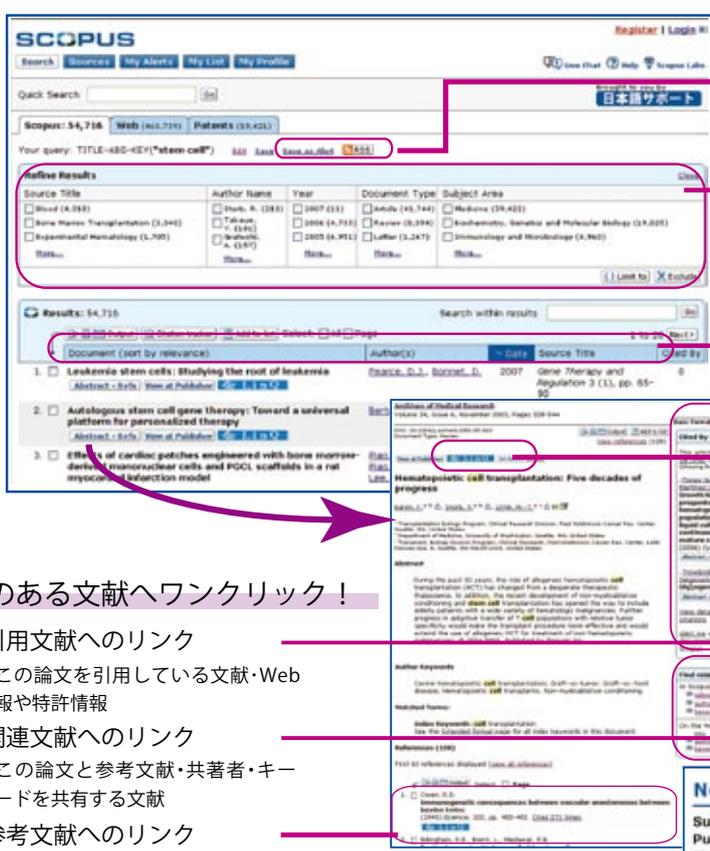
名誉教授・歯 中山 宏明

「遺伝子から生命をみる：分子生物学の誕生と発展」
関口陸夫[ほか]著 共立出版 2006.4
ISBN: 4320056302
[中央図書館 / 医学分館]

使ってますか？ SCOPUSTM Find out.

SCOPUS(スコパス)とは？

世界最大級のデータ量を誇る新しい学術情報ナビゲーションツール。世界4,000社、15,000の学術雑誌の抄録が調べられます。



充実のパーソナル機能

RSSや電子メールで、最新の論文情報、引用情報、雑誌目次情報が入手できます。

検索結果の絞込みが簡単・充実

検索結果を雑誌名、著者、年度、分野などでグルーピング。直感的に全体像が把握でき、簡単に絞りこめます。

ボタンひとつで、検索結果を並べ替え

タイトル、著者、出版年、ジャーナル名、引用回数でソートできます。

☆きゅうとLinQで、効率よく文献を入手！

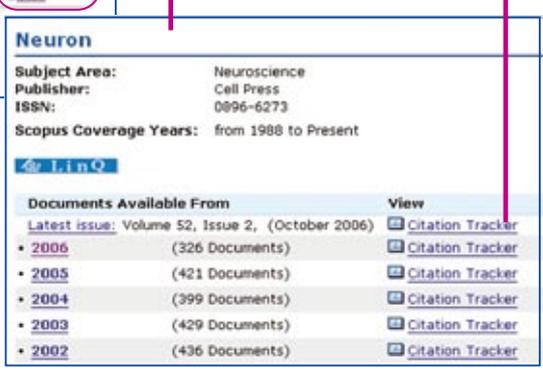
関連のある文献へワンクリック！

- ◇引用文献へのリンク
—この論文を引用している文献・Web情報や特許情報
- ◇関連文献へのリンク
—この論文と参考文献・共著者・キーワードを共有する文献
- ◇参考文献へのリンク

Citation Tracker で多様な引用分析

論文、雑誌、著者、研究テーマなど様々なアプローチから被引用回数が参照でき、多様な分析が可能です。

雑誌名からのブラウズも可能



www.scopus.com

学内からご利用ください

図書館員の おしやべり コラム

長期研修のため、オーストラリアのブリスベンにやってきました、3か月が過ぎた。

オーストラリアには、モーニングティーという習慣がある。勤務先のQueensland University of Technologyでも、朝10時頃に休憩を取ってよいことになっており、職場の休憩室や、学内のあちこちにあるカフェで、職員こぞってお茶を飲んでいる。

大人数でテーブルを囲み、他愛のないお喋りをしていることが多いが、誰かの誕生日だったり、新しい職員を迎えたりするときは、この時間にお祝いや歓迎会を開くこともある。また、ちょっとした打ち合わせがカフェで行なわれたり、会議の合間のモーニングティーが参加者の自己紹介の場になったりと、仕事上の情報交換に役立つ場合も多い。仕事帰りに一緒に食事をしたり、お酒を飲んだりすることがまれなオーストラリアの人達にとって、モーニングティーは、コミュニケーションの時間として大切にされているのだと思う。

(中央図書館 N.H.)

